

原著論文

## 施設内高齢者における対話・交流の現状と交流ニーズ明確化の試み —施設内高齢者の理解とボランティア導入の支援として—

保科寧子<sup>1)</sup>

【目的】本研究は施設内高齢者の対話や交流満足度とそれらへの意向の明確化を目的とした。

【方法】関東地方の複数の高齢者施設に入所する高齢者 68 名を対象とし、研究期間は 2011 ～ 2016 年である。院内高齢者の対話・交流の満足度と交流に対する意向等を本人から聞き取り、単純集計と相関分析、質的帰納法的手法にて分析した。

【結果】高齢者の 57.4%は施設入所後、交流の機会が減ったと回答した。また全体の 47.1%の高齢者は交流を好んでおり、「対話が好きである」という質問と、「良い交流が体調に影響を与えらると思う」という質問の回答にはやや正の相関がみられた。加えて施設内の交流に何らかの不満を感じている高齢者は 32.3%いた。そして交流提供者には自分よりも元気で介助の必要でない人を求める傾向があった。

【結論】交流を好む高齢者は、良い交流が体調に良い影響を与えらると考える傾向がある。交流の対象者として施設内高齢者は体調に問題の無い人を求めており、施設利用者同士の交流よりも比較的若く健康なボランティアとの交流を希望していた。高齢者のニーズに合うボランティアの活用により施設内高齢者の QOL 向上の可能性はある。

キーワード：交流，対話，傾聴ボランティア，満足度調査，QOL

---

<sup>1)</sup> 埼玉県立大学

## I. 緒言

日本において介護や支援を必要とする高齢者は増加の一途をたどっており、その対応策として厚生労働省は各地域での地域包括ケアシステムの構築を目指している。地域包括ケアとは要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供されるものと定義される<sup>1)</sup>。地域包括ケアにおいては、日本の厳しい財政状況も踏まえ地域住民がボランティアとして地域包括ケアに関わることが期待されている。

このように高齢者福祉分野でのボランティアへの期待は大きくなっている。日常生活の直接ケアを担う介護保険では対応しにくい対話や交流の提供を中心とした高齢者への支援は、認知症ケアを行う専門職に導入ニーズがあり<sup>2)</sup>、またボランティア活動に関心を持つ市民が初期段階で取り組みやすい活動として以前から関心を集めている<sup>3) 4) 5)</sup>。

高齢者を対象とした傾聴ボランティアでは、主に精神的な効果としてボランティアを利用した高齢者の不安低減やカタルシス効果、自尊感情を高めるなどの変化がみいだされ<sup>6)</sup>、また傾聴ボランティアの利用が高齢者の気分の落ち込みを改善したことも示されている<sup>7)</sup>。

高齢者の話し相手となるボランティアには高齢者の情緒的サポート機能や意欲の向上、見守り機能などが期待され<sup>8)</sup> NPO 法人や社会福祉協議会等が中心となり日本の各地で養成されている<sup>3) 9)</sup>。

情緒的サポートとは、一般に「他者から与えられる愛情とケア、共感と理解あるいは尊敬、価値づけといったもの」を指し<sup>10)</sup>、情緒的サポートが身体機能に及ぼす影響については次のような調査研究が行われている。オランダの調査では情緒的サポートの受領が中程度以上の人は早期死亡リスクが低く、孤独感の強さは早期死亡と関連があることが示されている<sup>11)</sup>。またスウェーデンの男性に対する調査では5年の追跡研究の結果、情緒的サポートの受領の少ない人は早期死亡リス

クが高くなることが明らかになっており<sup>12)</sup>、日本での調査では、後期高齢者における子どもや友人との接触がない、社会参加がないという状況と早期死亡との間には負の相関がみられる<sup>13)</sup>ことが示され、交流や社会参加のない人ほど早期死亡となる傾向がある。

しかし、日常生活の直接ケアを主軸としている介護保険などのフォーマルサービスだけでは十分に情緒的サポートを提供することは困難であり、ボランティアにその役割が期待されていることも、各地で話し相手ボランティアや傾聴ボランティアが広まっていることと関係していると考えられる。

そしてボランティア活動者は複数の社会的な活動を行う人も多い<sup>14)</sup>。はじめに活動しやすい対話・交流を行うボランティア活動の実践で力をつけたボランティアが、それを足掛かりとして、次に難易度の高いボランティア活動を行っていくことが期待でき、地域包括ケアを担う人材のすそ野を広げることともなるであろう。

対話や交流を行うボランティアの推進は、高齢者および地域包括ケアの推進に対して上記のようなメリットがあるが、そのボランティアの訪問を受ける高齢者についての研究の蓄積は十分ではない。高齢者は現在の交流に満足しているのか、どのような交流が求められているかについて、文献検索にて先行研究を確認しても高齢者の視点から調査した研究はまだ少ない。そこで、高齢者の中でも生活に制約があり、主体的な交流機会の少ないと考えられる施設に入所している高齢者を対象として交流や対話の現況やそのニーズを調査した。

本研究に関連する先行研究では、対話・交流を行うボランティアの利用ニーズの高い高齢者はうつ傾向の高いことが明らかになっているが<sup>15)</sup>、精神状況とボランティアの利用意向の関連のみを調査したものであり、高齢者の対話や交流に対する包括的なニーズの把握には課題があった。そこで今後は高齢者の対話・交流に対するニーズを様々な角度から明確化することが必要となる。

加えてボランティア活動の初心者が最初の

活動として選びやすい対話・交流を行うボランティア活動においては、その活動の充実感が今後のボランティア活動への意欲や自信に影響を与えると予測される。そこでボランティア活動を行う人々とボランティアを受け入れる施設や人々の間を調整するボランティアコーディネーターは高齢者の傾向をできるだけ把握し、相互に良い交流の行うことのできるボランティア活動者をマッチングすることが重要となる。そのためにはボランティアを受け入れる高齢者の実態を把握することが不可欠であると考えられる。

## II. 研究の目的

本研究では、施設に入所している高齢者の対話・交流に対する満足度と対話や交流に対する意向、対話・交流を行うボランティアに対するニーズの明確化を試みた。これにより施設内高齢者の交流と対話の現状とニーズを把握し、効果的なボランティア活動の実施を支援することで施設内高齢者の交流の質を高め、高齢者の生活の質の向上の一助としたい。

## III. 研究方法

調査対象は、国内の複数の高齢者施設（特別養護老人ホーム、有料老人ホーム、老人保健施設）に入所または利用中で、調査に協力の得られた68名の高齢者である。なお、調査対象施設は地域性に偏りのないよう複数の県から選定した。調査対象者の基本属性は、男性10名、女性58名、平均年齢85.04 ± 7.79歳、日常生活動作能力のレベル（バーセルインデックス得点）は、平均53.13 ± 25.03点、調査対象者の入所期間は38.11（月） ± 36.7であった。またほぼ全員が柄沢式老人知能の臨床的判断基準による認知症レベル軽度から中程度にあてはまった。

調査は、高齢者のケアを行うスタッフから、年齢、性別、日常生活動作能力のレベル、認知症レベル（柄沢式老人知能の臨床的判断基準）などの基本的な情報を得た後、本人から対話・交流に関する意向を調査用紙に従って1名につき1回ずつ聴取した。調査対象者の選定において認知症レベルは中程度までと

し、調査時点で自分の意向を他者に伝えることのできる方を施設職員から紹介を受けた。

聞き取り調査期間は、2011年から2012年であった。収集した調査データはその全体像をつかむため単純集計、順位相関係数にて分析し、分析にはIBM SPSS Statistics V24を用いた。あわせて聞き取り調査時に得た自由回答を質的帰納法的手法にて分析し、高齢者の求める交流について複数の研究手法を用いて多角的に検討することを目指した。

### 1. 施設内高齢者の対話・交流の現状と対話・交流に対する意識や満足度

①施設に入所する前と後で対話・交流の機会の増減（5段階尺度）、②対話・交流を好むかどうか（5段階尺度）、③対話・交流の満足度（5段階尺度）、④対話・交流を行うことにより体調が良くなるように感じるかという主観的体調の改善（5段階尺度）について聴取した。これらの変数について、①③間、②③間、③④間、②④間のそれぞれでKendallの順位相関係数を算出し、関連性を検討した。あわせて①から④の回答について単純集計を行い、施設内高齢者の全体的な対話・交流の意識や満足度の傾向を確認した。これらの設問については、対話・交流を行うボランティアの職員向けのニーズの検討<sup>2)</sup>やボランティア養成講座の内容と評価に関する先行研究<sup>15)</sup>を踏まえ、まだ調査実績の少ない、施設入所による対話・交流の機会の変化や対話・交流の満足度、主観的な健康との関係に注目して作成した。

### 2. 単純集計による施設内高齢者の求める交流提供者と交流内容

「もし、話し相手としてボランティア1人が無償で訪問してくれるサービスを利用することになったら、どのような人に来てもらいたいですか」という質問を設け、具体的に項目をあげて、施設内高齢者に対して来てもらいたいか、来てもらいたくないかの2択で回答を得た。

あわせて「もし、話し相手としてボランティア1人が無償で訪問してくれるサービスを利

用することとなったら、どのような人がくると話しにくくなってしまいますか」という質問を設け具体的に項目をあげて、施設内高齢者に対して来てもらいたい、来てもらいたくないかの2択で回答を得た。

そしてこれらの項目について単純集計を行った。なお、調査項目の設定においては先行研究において対話・交流を行うボランティアには見守りの機能がある<sup>8)</sup>ことが示されていたので、本研究において交流提供者の特徴の中に「交流時の高齢者の様子を施設職員へ報告する人」という見守りを行う人を意識した項目を設定した。加えて、傾聴ボランティアまたはお話し相手ボランティアの名称で実施されているボランティア講座の教育内容<sup>3) 16)</sup>を参考に傾聴スキルのある人を希望するかを問うた。また、訪問を希望する人の性別と年齢への意向もあわせて聴取した。

### 3. 自由回答による施設内高齢者の求める交流提供者と交流内容

「自分以外の人とのおしゃべり（お話し）をすることについてのご意見を何でもお話しください。」という質問から自由回答を得た。この質問項目から得た回答内容について類似性の高いものを集約しカテゴリ化した。分析の過程は2名で実施し、はじめに研究者が分類したものを研究協力者に確認し、見解の一致しないところは協議を行い修正し、再カテゴリ化を行った。自由回答は、1回のインタビューであることや、認知機能の低下のある高齢者も対象となっていたため、回答を深く掘り下げることが困難なケースもあった。そのような回答に対しては分析時に、文脈から意味を推測し、研究協力者と意味のすり合わせを行った。

## IV. 倫理的配慮

なお、本研究の実施にあたっては埼玉県立大学における倫理審査を経て、かつ調査対象者および調査対象施設の施設長から研究への承認を受けた上で実施した（承認番号20021）。調査対象者には、調査の途中でいつでも調査を中止できること、調査に協力しないことにより不利益を受けないこと、調査結果の公表にあたって個人の特定をされないこと等を説明し、同意を得ている。

いことにより不利益を受けないこと、調査結果の公表にあたって個人の特定をされないこと等を説明し、同意を得ている。

## V. 結果

### 1. 施設内高齢者の対話・交流の現状と対話・交流に対する意識や満足度

「今の施設での生活と施設に入る前の生活では、他の人と交流する機会はどのように変わりましたか。」という問いへの回答を単純集計すると、「減った」または「やや減った」と回答した高齢者は57.4%、「どちらともいえない」と回答した高齢者は27.9%、「やや増えた」または「増えた」との回答は13.2%であった。総じて、施設入所により対話・交流の機会は減少したと感じている高齢者の多いことが示された。

また「他の人と対話をしたり、一緒に過ごしたりすることは好きですか。」という問いへの回答の単純集計は表1の通りである。全体の47.1%の高齢者は交流を好んでいたが、33.8%は交流を好まない傾向にあった。

「他の人と交流して楽しく過ごす時間があると自分の体の調子が良くなる感じがしますか。」という問いには、47.1%が良い交流は体調に良い影響を与えるように感じると回答している。

対話が好きであるということと、良い交流が体調に良い影響を与えるように感じるという質問の回答にはやや正の相関があり( $r=0.331$ ,  $p=0.009$ )、対話の好きな高齢者の主観的な体調に、交流がある程度の影響を与えることが示された。

なお、これ以外の組み合わせでは相関は見られなかった。従って、施設入所により対話・交流が減少したことと、対話・交流の満足度との間には関連は見られなかった。また、対話・交流を好むかどうかとの回答と、対話・交流の満足度にも関連はない。加えて調査時点の対話・交流の満足度と交流により主観的な体調の変化があると感じるかという回答にも関連はみられなかった。

しかし表1に見る施設内高齢者への「現在の施設生活での他の人との交流に満足してい

ますか。」という設問への回答に、ややそう  
思わない、そう思わないと回答した施設での  
交流に何らかの不満を感じている高齢者は  
32.3%であり、約3人に1人の計算となる。

## 2. 単純集計による施設内高齢者の求める交 流提供者と交流内容

施設内高齢者の交流のための訪問者に対す  
る意向を表2および表3に示す。守秘義務を  
守る人を希望する高齢者が47.1%と最も多  
かった。調査対象者の話を聴く人よりも訪問

者自身が積極的に話をする人を希望する高齢  
者の方がやや多かった。一方、交流のための  
訪問者の足が悪い、耳が遠いなど介助を要す  
るような身体状況であるならば訪問を希望し  
ないという回答が55.9%、高齢者に対して個  
人的な質問をする訪問者を希望しないという  
回答が27.9%となっている。また訪問相手  
には同性を希望するという回答は63.2%、訪  
問者の年齢にはこだわらないという回答が  
54.4%であった。

表1 施設内高齢者の対話・交流の現状および対話・交流に対する意識や満足度 N=68

質問項目	減った	やや減った	どちらとも いえない	やや増えた	増えた	無回答
今の施設での生活と施設に入る前の生 活では、他の人と交流する機会はどの ようになりましたか。	31 (45.6%)	8 (11.8%)	19 (27.9%)	6 (8.8%)	3 (4.4%)	1 (1.5%)
質問項目	そう思う	ややそう思う	どちらとも いえない	ややそう 思わない	思わない	無回答
他の人と対話をしたり、一緒に 過ごしたりすることは好きですか。	22 (32.4%)	10 (14.7%)	10 (14.7%)	16 (23.5%)	7 (10.3%)	3 (4.4%)
今の施設生活での他の人との交流に 満足していますか。	16 (23.5%)	12 (17.7%)	14 (13.2%)	9 (13.2%)	13 (19.1%)	4 (5.9%)
他の人と交流して楽しく過ごす時間が あると自分の体の調子が良くなる感じ がしますか。	27 (39.7%)	5 (7.4%)	15 (22.1%)	2 (2.9%)	16 (23.5%)	3 (4.4%)

表2 交流を希望する交流提供者の特徴 (複数回答) N=68

項目	訪問を希望する高齢者数
自分と同じような経験を持つ人	17 (32.1%)
誰にも言わないでほしいといったことは ほかの人に言わない人	32 (47.1%)
相手の話を聴くことが好きな人	26 (38.2%)
自分の話をするのが好きな人	29 (42.6%)
訪問相手の年齢は問わない	37 (54.4%)
訪問相手には同性を希望する	42 (63.2%)

※質問では、希望する場合に「はい」と回答、項目内容が気にならない場合には「いいえ」と回答して  
もらった。

表3 交流を希望しない交流提供者の特徴 (複数回答) N=68

項目	訪問を希望しない高齢者数
高齢者に対して個人的な質問をする人	19 (27.9%)
交流提供者自身への個人的な質問を拒否する人	8 (11.8%)
交流提供者が介助を要する人 (例示: 足が悪く杖を使う 耳が遠い)	38 (55.9%)
不定期に訪問する人	8 (11.8%)
交流時の高齢者の様子を施設職員へ報告する人	10 (14.7%)

※質問では、希望しない場合に「はい」と回答、項目内容が気にならない場合には「いいえ」と回答してもらった。

### 3. 自由回答による施設内高齢者の求める交流と交流提供者

交流に関する自由回答の内容を大きくカテゴリ化すると、希望する交流相手、希望する交流の方法、交流の効果、交流への不安感や負担感の4つに大別できた。このカテゴリ化の結果を表4に示す。

希望する交流相手カテゴリと希望する交流方法カテゴリの双方に、自分のつらいことを聞いてもらいたい、主体的に交流提供者が話をし、高齢者の知らないことを教えてほしいという意向が示され、重なる内容が確認された。希望する交流相手のカテゴリ内の分析にて、高齢者から出た「素直な人」という言葉は、文脈から判断して「話しをよく聴く人」と理解し、傾聴のカテゴリに含めた。ほか、話の合う人や朗らかな人、ざっくばらんな人と交流したいなどの意向があった。

希望する交流方法については、長時間での交流や個別ではなく、少人数のグループや入所施設全体での交流、訪問者の固定などが具体的に要望された。

交流の効果として、従来から指摘されてきた情緒的サポートのほか、リハビリの際の体の動きが良くなるといった身体機能への好影響も示された。

交流を行うことに前向きで希望する相手や交流の方法を話した高齢者のいる一方で、外部の人は自分とは話などできないのではないかと回答や交流を負担と感ずるとする意見もあった。

## VI. 考察

### 1. 施設内高齢者の対話・交流の現状と対話・交流に対する意識や満足度から

施設内高齢者において施設入所により57.4%の高齢者は、対話・交流の機会が減少したと感じており、機会が増加したという回答は13.2%であった。施設の入所により高齢者は対話・交流の機会が減少していることが確認できた。しかし、対話・交流の機会と施設での生活の中での対話・交流に対する満足度には相関は無く、機会の減少が不満足に直接的につながっているわけではないことが明

表4 施設内高齢者の交流に関する自由回答(複数回答) 自由回答への回答者13人

大カテゴリ	中カテゴリ	分類された回答
希望する交流相手	傾聴し話を発展させる人	話をよく聞いて発展させてくれる人がよい。 何か話すとき受け止めて喜ぶようなことを用意してくれる人がよい。 若い人にはいろいろと教えてあげる。若い人は素直でよく話を聞くので好きだ。 素直な人がよい。
	自ら話し、教えてくれる人	いろいろな世界状況などについて話してくれる人がよい。
	ざっくばらんな人	何でもざっくばらんに話してくれる人がよい。
	朗らかな人	ほがらかな人がよい。
	話の合う人	話の合う人がよい
希望する交流形態	全体での交流	自分のためだけにボランティアが来たら気兼ねして困る。ボランティアは全員に対して何かしてほしい。
	長時間の交流	人とゆっくり(長い時間)おしゃべりできるとよい。
	訪問者の固定	忘れっぽくなったのが気になる。昔はこんなじゃなかったのに。名前など忘れてしまう。いろんな人というより決まった人。
	傾聴 社会の出来事を教えてほしい	排泄がおむつであることが一番つらいこと。自分のことを聞いてもらいたい。 人と話をすると利口になる。知らないことを知ることができるようになる。人の話を聞くのが好きだ。社会のことなどわからなくても知りたいので話してほしい。
交流の効果	体の動きの変化	部屋でリハをする時、話をしたほうが体がよく動く。
	情緒的サポート	人と話すことは自分にも相手にもプラスになる。高齢者にはその人の人生を聞いてあげるとよい。 人と話すことで力をもらう。認知症でも話をすることは大切。よく話を聞けば穏やかになるし邪魔者扱いされれば厳しくなる。
交流に対する不安感 や負担感	受け入れられないことへの不安	自分から声をかけて話をするのは苦手。自分と話してくれる人はいない。外部の人は今の自分(バカのような)と話などできないのではないかと思う。
	交流に対する負担感	難聴なので他の入所者と話がしにくい。話ができたら良いが仕方がない。 自分のことを自分でできるようにしないと人と話す気にはなれない。 面倒な時もある。

らかになった。

また本研究では高齢者の47.1%は交流や対話を好み、33.8%は好まないことが示された(表1)。対話・交流のニーズは個別性が高く、導入においては十分な検討が必要であると考えられた。上記質問に交流を好まないと回答した高齢者においては、対話や交流の場の設定が負担となることも考えられるので、高齢者のケアプランや支援計画の中に交流を位置付けていく際には、高齢者の背景の情報(例えば人柄、家族や友人などとの関係、生活歴など)を基に社会との関わりやコミュニケーションの状況や意向を考えることが必要だと考える。

また単純集計では、施設内高齢者の47.1%が「他の人と交流して楽しく過ごす時間があると自分の体の調子が良くなる感じがしますか。」という質問に、そう思う、またはややそう思うと回答している。自由回答(表4)にも、リハビリをするときに話をすると体がよく動くというものがあつた。加えて交流や対話を好むこととこの質問との間にある程度の相関が示されたことから、対話や交流を好む高齢者に対して質の良い交流を提供することにより、従来指摘されている情緒的サポートに加え、主観的な体調も改善される可能性がある。

施設内高齢者においては3人に1人が現在の交流に何らかの不満を感じていることから、この交流満足度を向上させるだけでも施設内高齢者の主観的なものではあるが体調が改善し、施設内での生活の質の向上が期待できるのではないだろうか。アセスメントに基づき対象の高齢者に適したボランティアを導入したり、施設内で交流の場を設定したりすることで、実現可能となると考えられる。

また本研究の自由回答内容では、自分の対話・交流の能力の低下を感じており、それゆえに交流を求めても他者に受け入れてもらうことができないのではないかと不安が示された。難聴により交流の阻害されている状況を示した回答もある。認知、身体機能の低下が交流への不安や負担の原因となる場合があることが明らかとなった。これらの高齢者

への不安に向き合うことが、高齢者の交流の質を向上させ、ひいては生活の質を向上することに繋がると考えられる。

## 2. 施設内高齢者の求める交流提供者と交流内容から

本研究では施設高齢者が交流を望む、『交流の提供者』として「話をよく聴く人」よりも「自分が話をする人」を希望する回答が多かった。認知機能の低下のあるなかで、高齢者自らが話をするという交流のあり方は高齢者には負担となる場合もあり、このような結果となったと考えられる。相手の発語がないときには交流提供者側が話題を提供し積極的に話しかけ、もし相手から言葉が出てきたときには傾聴するような関わりが期待されているように見える。「素直な人」と交流したいという自由回答からもそれがうかがえる。

自由回答(表4中カテゴリ:受け入れられないことへの不安)の中に「外部の人は今の自分(バカのような)と話などできないのではないかと思う。」という回答があり、ここには自分を受け入れてもらえないのではないかという不安が確認できる。相手を受け入れ、不安を解消できように関わる姿勢が求められていた。

また対話の相手には守秘義務を守ることが期待され、不躰に個人的な質問をしないことが期待されていた。今回、先行研究の対話・交流を行うボランティアの見守りの機能<sup>8)</sup>から交流提供者の特徴の中に「交流時の高齢者の様子を施設職員へ報告する人」という見守りを行う人を意識した項目を設定した。結果として、そのような報告をする人の訪問は希望しないという回答が14.7%あり、質問が一部の施設内高齢者には守秘義務を守らない人というイメージを与えたのかもしれない。けれども職員の気づかない状況を気づいた人が報告する体制を整えておくことは、リスクマネジメントの視点からも重要である。そこで早期に高齢者と信頼関係を築き、高齢者の様子を報告することと、話した内容を軽率に外部に漏れいすことの違いを、高齢者自身を含めた関係者すべてが理解し、高齢者に見

守りを受け入れてもらうことがケアの質を高める効果的な交流の提供に結びつくと考えられる。

次に特筆すべき点として対話や交流の提供者について介助の必要な人を希望しないという回答が55.9%であったことを検討したい。施設内高齢者においては、介助の必要のない人と交流したいという意向が明らかになった。

がん患者やその家族、アルコール使用障害の人々など、同じ体験を持つ人と語り合うことは精神的な支援となる<sup>17) 18) 19)</sup>ことが明らかになっており、同じ立場の人同士での支えあいが積極的に行われている。そこで本研究においても身体機能の低下のある施設内高齢者がそのことについてお互いに話し合える対象としてこの項目を設定したのだが、結果では施設内高齢者は介助の必要な人との交流は求めない人が過半数を超えた。

また、施設内高齢者の50%は交流対象者の年齢にこだわりはないが、残りの50%には希望がある。自由回答の若い人を希望するという回答や前述の介助の必要な人との交流は希望しないという点から、交流提供者の年齢に希望のある高齢者は自分よりも若く元気な人と交流したいという意向が読み取れる。

本調査の結果から、現時点では施設内高齢者同士の交流よりも、外部のボランティアの訪問の方が施設内高齢者のニーズに合っており、ボランティア導入により施設内高齢者の施設での交流満足度が上がると考えられる。

しかし留意点として、日本のボランティア活動を担う年齢層は60歳代が40%強であり、次いで50歳代70歳代が10%程度となっているため<sup>20)</sup>、ボランティア活動を継続していくと、加齢による身体機能の低下や疾患などによって比較的早くにボランティアの受け手のニーズから外れていく可能性がある。

あわせてボランティアの高齢化による活動の継続困難もさまざまなボランティア活動現場で指摘されている部分であり<sup>21)</sup>、今後の課題であろう。

加えて日本の多くの人においては、元気で自立した人がボランティア活動を行うという

イメージがあるのかもしれない。しかしボランティア活動に参加する障がい者からの発信<sup>22)</sup>にもあるように本来のボランティアは障害や機能の低下があっても自分のできることを社会に返すものであり、今後、高齢者の意識の変革を働きかけることが重要だと考える。そして施設内高齢者自身も周囲の人に対して自分のできること、例えば話を聴く、孤独を感じている人に寄り添うなどの行動の主体となることもできることを知り、それを実践していくことで、自分の役割が生まれ、より主体的に生きることが可能となると考える。

ボランティアもこのことを理解し、自身の身体機能が衰えても自分の強みを生かし長くボランティア活動を続けることが必要だと考える。それによって個人個人の生活も充実し、社会にとっても社会資源となる人材を増やすこととなるだろう。

また一方で自分と同じような体験をした人と交流をしたいという回答は32.1%あり、同郷であったり、職業が同じであったりする人との交流は3人に1人が期待していることがわかる。この違いについても今後検討していく必要があると考える。

施設内高齢者の希望する交流の種類は、自由回答からみると様々な形態が期待されていた。様々な人が入れ代わり立ち代わり訪問すると覚えていることができないので、決まった人の訪問を希望するという意見は、施設に入所している高齢者の記憶力や認知機能の低下が想定される現状では配慮すべき点である。

加えてグループや施設全体での交流の希望もあり、その場合には交流の提供者はグループのファシリテーターとして関わることとなる可能性もある。

### 3. 高齢者の対話・交流へのニーズに応えるボランティアとは

本研究では、高齢者は認知機能の低下などにより、話をしたいと思っても十分に表現できないため、ボランティアからの話しかけを期待していることが明らかになった。言葉の



出ないときには、黙って静かに一緒に時を過ごすだけでも良いのかもしれない。

施設内高齡者の求める交流提供者像から、彼らの対話・交流の満足度を高めるために、ボランティアの導入を行うことは有効であると推測される。しかし、「元気がない」といった本人の様子をボランティアが職員へ報告するような見守りとしてのボランティア活用が、守秘義務違反ととらえられる可能性もあることが考えられた。ボランティアの役割理解について、ボランティアへの教育とともにボランティアを利用する高齡者への啓発も必要である。

加えて高齡者グループへの交流の提供も期待されていた。しかし円滑な交流を促進するには技術があるので、この場合にはある程度力量のある人に依頼するなどボランティアのコーディネートの際には配慮が必要である。コミュニケーション能力の高い人や、ある程度の実績を積んだボランティア活動者にグループを任せることで、交流の質が上がり、施設内高齡者だけでなく、ボランティア活動者の自信や意欲も向上すると考えられ、高齡者福祉分野でのボランティアの広がり支援することにもなる。

#### 4. 本研究の限界と今後の課題

本研究は調査数が十分ではなく、また国内すべての種別の施設を網羅したものでもないため、即時の一般化は困難である。

今回の調査により施設内高齡者は、自分よりも元気な人を交流相手として希望するケースが多いことが示された。杖歩行や耳が遠いなどの軽度であっても要介助者との交流を希望しない施設内高齡者が多かった。本研究の範囲ではその理由を明らかにすることはできず理由を推測するにとどまるが、今後分析や調査を進めていくことで、より適切な交流の提供が可能となると考える。

また本研究では施設内高齡者の対話・交流の状況とそのニーズの調査を目的としたため、健康との関連についても主観的な健康のみを取り上げている。今後は、対話・交流の効果を明らかにするため、より医学的な見地

から対話・交流が高齡者に及ぼす影響を検討し、その効果を考える必要がある。

#### VII. 結語

施設内高齡者における対話・交流に対する意向と希望する交流の現状について高齡者自身からの聞き取りを行った結果を分析した。

交流を好む高齡者は、良い交流が体調に良い影響を与えると考える傾向があった。交流の対象者として、施設内高齡者は体調に問題の無い人を求めており、施設利用者同士の交流よりも比較的若く健康なボランティアとの交流を希望していた。調査対象のうち47.1%の高齡者は対話・交流を好み、交流の活用によって主観的な体調改善や情緒的サポートの受領が期待できると考えられた。

また自由回答からは、現在の自分を受け入れてもらえないのではないかという不安も読み取れ、ボランティアには不安を解消できるように関わっていくことが求められる。加えて認知機能の低下のある高齡者も多く、自分から積極的に発語することの難しい場合もあるので、ボランティアには積極的に話をしてもらいたいという意向も見られた。

ボランティアの導入により高齡者と交流により生活の質の向上などの効果が感じられるようになると、ボランティア活動者も自信をつけ、さらに活動に積極的となることが期待でき、人材育成の視点からも良い影響を及ぼすと考えられる。

#### VIII. 謝辞

本研究の調査にご協力いただいた調査対象施設の利用者の皆様、職員の皆様をはじめ、本研究のためにご指導ご助言くださった皆様に感謝いたします。

#### IX. 参考文献

- 1) 厚生労働省ホームページ 地域包括ケアへ向けて  
[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/) (2016.6.22)
- 2) 保科寧子：高齡者ケアに携わる職員に

- おける対話・交流を行うボランティアのニーズの検討 -- 高齢者専門病院での調査から. 高齢者ケアリング学研究会誌 2(1), 1-9, 2011
- 3) ホールファミリーケア協会 (編) : 傾聴ボランティアのすすめ. 第4版, 三省堂, 2004
  - 4) 村田久行 : 対人援助における " 聴くこと " の意味 - 傾聴ボランティアの実践から. 社会福祉実践理論研究, 7, 1-12, 1998
  - 5) 小澤元美, 山中克夫 : シニア傾聴活動の動向および今後の展望 (特集 高齢者ケアの最前線 (2)). 保健の科学, 47 (9), 648-652, 2005
  - 6) 野崎瑞樹 : 高齢者に対する傾聴ボランティアの効果の質的検討. 日本文理大学紀要, 34 (1), 83-88, 2006
  - 7) 小澤元美, 山中克夫 : シニア傾聴活動による利用者の日々の気分およびQOLに与える影響に関する事例研究. リハビリテーション連携科 (2), 93-100, 2007
  - 8) 保科寧子, 奥野英子 : 在宅高齢者を対象として対話や交流を行うボランティアの機能分析 : 話し相手ボランティアの事例分析から. 社会福祉学, 49(2), 111-122, 2008
  - 9) 札幌市社会福祉協議会ホームページ 傾聴ボランティア研修  
[http://www.sapporo-shakyo.or.jp/volunteer\\_lab0/detail/6014.html](http://www.sapporo-shakyo.or.jp/volunteer_lab0/detail/6014.html)
  - 10) Thoits, P.A.: Stress, coping, and social support processes: where are we? What next? Journal of health and social behavior, 35, 53-79, 1995
  - 11) Penninx, B.W.J.H., Tilburg, T., Kriegsman, D. M. W., Deeg, D.J H., Boeke, A J.P., & Eijk, J. T. M.: Effects of Social Support and Personal Coping Resources on Mortality in Older Age: The Longitudinal Aging Study Amsterdam. American Journal of Epidemiology. 146, 510-519, 1997
  - 12) Hanson, B.S., Isacson, S.O., Janzon, L., & Lindell, S.E. : Social network and social support influence mortality in elderly men. The prospective population study of "Men born in 1914," Malmö, Sweden. American journal of epidemiology, 130 (1), 100-11, 1989
  - 13) Yasuda, N., Zimmerman, S.I., Hawkes, W., Fredman, L., Hebel, J.R., & Magaziner, J.: Relation of Social Network Characteristics to 5-Year Mortality among Young-Old versus Old-Old White Women in an Urban Community. American Journal of Epidemiology, 145, 516-523, 1997
  - 14) 全国社会福祉協議会 : 全国ボランティア活動実態調査 (平成 22 年 7 月発行). 112, 2010  
[http://www.shakyo.or.jp/research/20140808\\_09volunteer.pdf](http://www.shakyo.or.jp/research/20140808_09volunteer.pdf) (2016.7.5)
  - 15) 保科寧子 : 施設内高齢者の精神の状態と対話・交流を行うボランティアの利用意向との関係. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 34(3), 203-208, 2011
  - 16) 保科寧子 : 高齢者を対象として対話や交流を行うボランティアトレーニングプログラムの効果評価. 社会福祉学, 50(4), 122-132, 2010
  - 17) 山口恵, 篠原百合子, 伊藤美和, デッカー清美 : 女性アルコール依存症者の回復要因の検討. 医学と生物學 : 速報學術雑誌, 157(6-1), 905-910, 2013
  - 18) 室田紗織, 武居明美, 神田清子 : がんサバイバーがセルフヘルプグループでの活動を通じて新たな役割を獲得するプロセス. 北関東医学, 63(2), 125-131, 2013
  - 19) 金子絵里乃 : 小児がんで子どもを亡くした母親の悲嘆過程 : 「語り」からみるセルフヘルプ・グループ / サポート・グループへの参加の意味. 社会福祉学, 47(4), 43-59, 2007
  - 20) 全国社会福祉協議会 : 全国ボランティア活動実態調査 (平成 22 年 7 月発行). 43-45, 2010  
[http://www.shakyo.or.jp/research/20140808\\_09volunteer.pdf](http://www.shakyo.or.jp/research/20140808_09volunteer.pdf) (2016.7.5)
  - 21) 厚生労働省 : 「地域包括ケアシステム」事例集成 ~ できること探しの素材集 ~.

2014

<http://www.kaigokensaku.jp/chiiki-houkatsu/> (2016.7.5)

22) 兼氏浩子：すてきな世界の愛言葉～  
車椅子の上から見たもの～文芸社、  
2012

---

連絡先：保科寧子

〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮 820

埼玉県立大学 保健医療福祉学部

Tel : 048-973-4753

E-mail : hoshina-yasuko@spu.ac.jp

平成 28 年 7 月 19 日 受付

平成 28 年 9 月 28 日 採用決定

# Elderly persons' current situation, intentions and needs on conversation and companionship in residential facilities

Yasuko Hoshina<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> Saitama Prefectural University

**Purpose:** This study clarified the present situation and needs of elderly persons in residential facilities regarding conversation and companionship.

**Method:** Sixty-eight elderly persons residing in residential facilities were investigated for 5 years from 2011. The researcher interviewed the elderly people; collected data were analyzed by simple tabulation, correlation analysis, and quantitative analysis.

**Result:** 57.4% of elderly people agreed that opportunities of companionship decreased after they began to living in residential facilities. Of the elderly interviewed, 47.1% appreciated companionship. Responses to the item, "Good companionship brings about good subjective physical condition," showed poor positive correlation with those preferring conversation. Further, 32.3 % of the elderly people felt a degree of dissatisfaction regarding companionship within facilities for the elderly. In addition, many elderly people preferred the companionship of persons without needs of nursing care.

**Conclusion:** Overall, elderly in the facility expressed a greater need to interact with healthy persons for companionship than with other elderly people in their facility. There is a possibility of improve QOL of the elderly persons in residential facilities by volunteers to offer companionship.

**Keywords:** companionship, conversation, active listening, volunteer, satisfaction survey, QOL